

知的障害がある人たちのスポーツ活動からの休止、 離脱に関する一考察

Analysis of Reasons for Discontinuance from Sports Activities targeted at Persons with Intellectual Disabilities

田 引 俊 和^{*1}、松 本 耕 二^{*2}
仲 野 隆 士^{*3}、渡 邊 浩 美^{*4}

要旨

本研究では、知的障害がある人たちのスポーツ活動に関して、一度は障害者スポーツ組織に会員登録したものの活動を休止、あるいは離脱する要因等の検討を行った。その結果、大まかに参加者（回答者）側の理由に関するものと、障害者スポーツ組織側や活動内容に関するいくつかの因子、およびカテゴリーを確認した。

キーワード：障害者スポーツ(Disability Sports)／知的障害(Intellectual Disability)／
スペシャルオリンピックス(Special Olympics)

1. はじめに

当初、リハビリテーションを目的に行われていた障害がある人たちのスポーツ活動（以下、障害者スポーツ）は、現在では広く知られるようになり、競技型、あるいは参加型などを問わず、国内外で広く行われるようになってきている。

国内の大きな取り組みをみると、主に身体障害者を対象とした全国身体障害者スポーツ大会が1965（昭和40）年から開催されており、また、知的障害者を対象とした全国知的障害者スポーツ大会（ゆうあいびっく）が1992（平成4）年から開催されるなどそれぞれ歴史を重ねてきている。精神障害者についても2001（平成13）年に身体障害、知的障害が統合、改称された全国障害者スポーツ大会の第1回大会からバレーボールがオープン競技（2008、平成20年から公式競技）として

位置づけられるようになっている。（日本障害者スポーツ協会2009、2012）。この他、およそ4割の障害者が何らかのスポーツ、芸術活動に参加していることが報告されている（内閣府2008）。

もともと障害者スポーツは、戦後イギリスのグッドマン博士によるストークマンデビル病院での脊髄損傷者への医学的リハビリテーションにスポーツが起点で、身体面、心理面への効果がみられたとされている（藤田2008、高橋2004）。国内でもこれらの影響を受けながら、1964年のパラリンピック東京大会（第13回国際ストークマンデビル国際大会）の開催、全国身体障害者スポーツ協会の設立（1965年）、長野冬季パラリンピック（1998年）での日本選手団の活躍、前述の障害者スポーツ大会の実施など広がりを見せてきた（総理府編1997）。

また、制度政策面からも障害者スポーツの推進に言及がみられる。たとえば障害者基本計画（2002年）では「障害者スポーツをより促進させることを目的に、障害者の利用しやすい施設・設備の整備の促進及び指導員等の確保、全国障害者スポーツ大会の充実、民間団体等が行う各種のスポーツ関連行事を積極的な支援、日本障害者スポーツ協会を中心とした障害者スポーツの振興、特に普及

*1 TABIKI, Toshikazu
北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
障害者福祉論、障害者スポーツ

*2 MATSUMOTO, Koji
広島経済大学 経済学部

*3 NAKANO, Takashi
仙台大学 体育学部

*4 WATANABE, Hiromi
公益財団法人スペシャルオリンピックス日本

が遅れている精神障害者のスポーツの振興に取り組み」といった目標が掲げられ、より一層の障害者スポーツの推進が示された(内閣府2002、2003、2007)。さらに、2011年には新たにスポーツ基本法が施行され、第一条の目的、あるいは第二条の「国民の心身の健全な発達」「スポーツを通じた幸福で豊かな生活」という基本理念とともに、障害者スポーツについても「障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進」と示されている(文部科学省2011)。

2. 研究目的

近年、健康やQOL志向の高まりに加え、誰もが年齢等を問わず参加できる生涯スポーツ(総理府2000、山口2004)という考えのもと、スポーツ活動は一部のエリートアスリートだけのものではなくてきており、これは障害者スポーツにおいても例外ではない。

障害者がスポーツ活動に参加する理由について、藤田(2003)が身体障害者施設を対象に行った調査では、年間行事、あるいは定期的に運動・スポーツをすることについて、楽しみ、親睦を図る、健康維持、QOL向上などが報告されている。同様に知的障害児の参加理由については、コミュニケーションの学習や本人の楽しみといった結果が(守田・七木田2004)、また、知的障害者ではトレーニングプログラム、健康・体力といった因子(田引2012)が報告されるなど、多様なニーズに対して活動していることがうかがえる。

では、障害者スポーツの実施には課題はないのだろうか。本稿では、とくに知的障害がある人たちのスポーツ活動に関して、活動の休止、あるいは離脱者に焦点をあて、その背景や要因等を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

3. 研究方法

(1) 調査対象と方法

本研究では、知的障害がある人たちのスポーツ活動について、活動の休止、あるいは離脱の要因等を検討する基礎資料を得るために調査票を用いた量的な調査を行なう。なお、本来なら知的障害がある当事者を対象に、直接その休止、あるいは

離脱理由や真のニーズ、課題を把握すべきではあるが、知的障害の特性などにより調査結果に妥当性を欠く可能性がある。そのため本研究では、知的障害当事者ではなく障害者スポーツ組織の関係者、および保護者等を対象として調査、分析を試みる。

調査票は2012年に知的障害者スポーツ組織を通じて郵送により配布、回収した。当該スポーツ組織の会員であるものの、1年以上スポーツ活動に参加していない知的障害当事者の保護者、および活動を支援するスタッフ等を対象とした。配布数は201、回収は41(回収率20.4%)であった。調査票配布にあたっては、全て無記名調査票を用いた他、結果は研究目的にのみ使用され、かつ、統計的に処理を行い個人が特定されない旨を調査表に記した。また事前に関係者に調査内容を示し確認と同意を得た上で調査を実施した。

(2) 調査項目と分析方法

質問項目は大きく2群で構成した。一つは当該障害者スポーツ組織の活動を休止、あるいは離脱に関する要因12項目で、とりわけ「健康上の理由で活動に参加できない状況になった」「仕事など生活時間の都合で活動に参加できない」など、回答者側に関する質問群を設定した。もう一群では、「トレーニングレベルが高すぎる」「この障害者スポーツ組織のスポーツルールは厳しい」「活動場所までの移手段の確保がたいへん」など当該スポーツ組織の活動そのものに関係する14の質問項目を設定した。それぞれ「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階尺度で得点を与え、因子分析により活動休止、離脱の要因を検討した。

また、回答用紙の最後に自由記述コメント欄を設けて回答を得た。自由記述コメントは、KJ法(川喜田1967)を用いてグループ編成を行った。具体的には、得られた自由記述コメントについて、記載されている言葉や前後の文脈を検討してカテゴリーを生成して分析に用いた。

このほかに、当該障害者スポーツ組織で活動していたときのスポーツ実施状況や回答者の年齢等に関する質問項目を設定した。

(3) スポーツ、およびボランティアの位置づけ

スポーツという言葉については、ルールに基づいて身体能力を競い合うもの、あるいは、健康などを目指して行う身体活動などと解釈されるが（日本体育学会2006）、本調査においては運動量や負荷、ルールの習熟度などは特定せずに、調査対象とした障害者スポーツ組織が行うスポーツプログラム活動をスポーツとして扱った。

また、ボランティア活動については、自発的な行動の他、教育プログラムによるもの、企業単位での参加など多様化してきているとされるが（松岡・小笠原2002；田尾・川野2004）、本研究では参加の形態や動機に関わらず、調査対象とした障害者スポーツ組織でボランティアという形で活動に携わった全ての人たちを「コーチボランティア^{注1)}」、あるいは「一般（コーチ以外の）ボランティア^{注2)}」とした。

4. 結果**(1) 回答者の属性**

回答者の基本的属性を以下に示す。当該障害者スポーツ組織での役割、立場については、理事役員等が1名(2.4%)、コーチボランティア5人(12.2%)、一般（スポーツ場面以外の）ボランティア7人(17.1%)、知的障害当事者の保護者等24人(58.5%)であった。

活動をしていた時の頻度については、年に数回程度6人(14.6%)、月に1～2回が14人(34.1%)、週に1回程度が6人(14.6%)、週に2～3回程度が3人(7.3%)、会員登録や寄付等のみで具体的な活動に参加していないが9人(22.0%)であった。

活動期間については平均(5.85)±1/2SD(1.90)をもとに区分し、初期段階である1年未満が6人(14.6%)、1年～3.95年が16人(39.0%)、3.95～7.75年が9人(22.0%)、7.75年以上が6人(14.6%)であった。活動休止時の年齢については、10代-20代が10人(24.4%)、30代-50代が18人(43.9%)、60代以上が10人(24.4%)であった。(表1)

(2) 活動休止、離脱の因子

会員登録した障害者スポーツ組織での活動の休止、および離脱の要因について、はじめ主に回答者側の理由に関する12の質問項目の因子分析（固有値1基準、一般化された最小2乗法、プロマックス回転）により4つの因子を抽出した。(表2)

第1因子では「健康上の理由で活動に参加できない状況になった」「(病気などではないが)年齢が高くなってきて活動についていけない」「土日(余暇時間)はこの障害者スポーツ組織以外の別の活動に参加している」「家庭の事情で活動に参加できない状況になった」など、回答者の生活事情が大きく関係していることから「個人的な理

表1：回答者の基本属性 (n=41)

項目	カテゴリー	度数	%
当該スポーツ組織での役割・立場	理事・役員等	1	2.4
	コーチボランティア	5	12.2
	一般（スポーツ場面以外の）ボランティア	7	17.1
	知的障害当事者（保護者等が回答）	24	58.5
	欠損値	4	
活動の頻度	年に数回程度	6	14.6
	月に1～2回	14	34.1
	週に1回程度	6	14.6
	週に2～3回	3	7.3
	具体的な活動に参加していない	9	22.0
	欠損値	3	
活動していた期間	1年未満	6	14.6
	1年-3.95年	16	39.0
	3.95-7.75年	9	22.0
	7.75年以上	6	14.6
	欠損値	4	
活動休止時の年齢	10代-20代	10	24.4
	30代-50代	18	43.9
	60代以上	10	24.4
	欠損値	3	

表2：知的障害者スポーツ組織における活動休止・離脱理由（1）

因子と質問項目	I	II	III	IV
因子Ⅰ：「個人的な理由」				
健康上の理由で活動に参加できない状況になった	.985	.161	.026	-.137
(病気などではないが)年齢が高くなってきて活動についていけない	.900	-.063	-.143	.284
土日(余暇時間)はこの障害者スポーツ組織以外の別の活動に参加している	.669	-.141	-.001	.093
この障害者スポーツ組織以外に自分に合うボランティア活動の場を見つけた	.622	.039	-.297	.084
家庭の事情で活動に参加できない状況になった	.590	-.248	.265	-.388
因子Ⅱ：「当該障害者スポーツ組織に対する関心の喪失」				
この障害者スポーツ組織の活動に参加することがわずらわしくなった	-.105	.867	-.266	-.016
この障害者スポーツ組織以外に自分に合うスポーツ活動の場を見つけた	-.085	.851	.301	-.053
この障害者スポーツ組織の活動そのものに関心がなくなった	.390	.800	.164	.125
因子Ⅲ：「時間等の都合」				
土日(余暇時間)は主にプライベートな時間として使っている	-.199	-.015	.997	.207
仕事など生活時間の都合で活動に参加できない	-.015	.233	.907	-.082
因子Ⅳ：「スポーツボランティアに対する関心の喪失」				
ボランティア活動そのものに関心がなくなった	.064	.133	-.028	.886
スポーツ活動そのものに関心がなくなった	.151	-.218	.324	.684
α 係数	.81	.70	.73	.72
下位尺度間相関、平均±SD	I 2.45±1.06	-	.07	.35
	II 2.17±1.01	-	-.07	.30
	III 3.45±1.21	-	-	.17
	IV 1.69±0.90	-	-	-

表3：知的障害者スポーツ組織における活動休止・離脱理由（2）

因子と質問項目	I	II	III	IV
因子Ⅰ：「参加動機・条件とのズレ」				
毎回参加しないといけないという心的なプレッシャーみたいなものがある	.961	.044	.131	.240
トレーニングレベルが高すぎる	.645	.529	.038	-.047
1回あたりの活動時間が長い	.572	.236	.170	-.127
(自分の)年齢が高くなってきてトレーニングに参加できない	.566	.394	.158	.248
この障害者スポーツ組織では思ったほど自分の経験や知識が活かせない	.548	.043	.138	-.100
因子Ⅱ：「活動内容への思惑違い」				
この障害者スポーツ組織のスポーツルールは厳しい	.209	.827	.271	.198
この障害者スポーツ組織の活動では知的障害当事者への成果が感じられない	.089	.704	.263	.069
与えられた役割は自分にとっては負担である	.224	.530	.393	.052
因子Ⅲ：「移動・時間等の負担」				
交通費などの負担がたいへん	.177	.242	.864	.115
活動場所までの移動手段の確保がたいへん	.105	.260	.719	.120
活動の頻度(回数)が多い	.302	.486	.596	-.266
活動のために時間をやりくりするのが大変	.346	.113	.379	-.339
因子Ⅳ：「活動理念・方針に同意できない」				
この障害者スポーツ組織の理念・活動方針に同意できないところがある	.049	.221	.140	.967
α 係数	.86	.81	.80	
下位尺度間相関、平均±SD	I 2.37±1.00	-	.54**	.24
	II 2.02±.84	-	.61**	.36*
	III 2.59±1.01	-	-	.11
	IV 2.21±1.27	-	-	-

由」因子とした。続いて、「この障害者スポーツ組織の活動に参加することがわずらわしくなった」「この障害者スポーツ組織以外に自分に合うスポーツ活動の場を見つけた」「この障害者スポーツ組織の活動そのものに関心がなくなった」など「当該障害者スポーツ組織に対する関心の喪失」因子を確認した。さらに、「土日（余暇時間）は主にプライベートな時間として使っている」「仕事など生活時間の都合で活動に参加できない」を第3の「時間的都合」因子、「ボランティア活動そのものに関心がなくなった」「スポーツ活動そのものに関心がなくなった」などを第4因子の「スポーツボランティアに対する関心の喪失」とした。4因子間の相関は低く、ほぼ無相関であった。

続いて、障害者スポーツ団体、およびスポーツ活動に関する14の質問項目について、十分な負荷量が得られなかった一項目を除いて因子分析（固有値1、重みなし最小2乗法、バリマックス回転）を行い4つの因子を確認した。（表3）

第1因子では、「毎回参加しないといけないという心的なプレッシャーみたいなものがある」「トレーニングレベルが高すぎる」「1回あたりの活動時間が長い」など回答者の意識と活動との関係性による「参加動機・条件とのズレ」因子とした。第2因子は、「この障害者スポーツ組織のスポーツルールは厳しい」「この障害者スポーツ組織の活動では知的障害当事者への成果が感じられない」など活動そのものに関する「活動内容への思

表4：知的障害者スポーツ組織における活動休止・離脱理由（3）自由コメントの分類

カテゴリー	実際の回答
メンバー間の関係・雰囲気	会費を払わないで役員をつとめていたり、大会に参加する人がいて疑問を感じた。(保護者) 前から参加しているグループの方たちがいて、新しいメンバーは入りにくい状況だった。(保護者) 同じ障害を持っている仲間全員で差別なく楽しめる場所だと思っていたがそうではなかった。一般の教室の方が差別感なく扱ってくれると感じた。(保護者) 一般の教室でレッスンの方が気楽だと思った。結局、日の当たるメンバーは一緒だと思った。(保護者) コーチボランティアとして不要というような扱いを受けた。(ボランティア)
仕事などの都合	就職したので休止している。(ボランティア) 本人が就職をして、本人としても休日には休息したいようだ。(保護者) 本人の仕事の都合上、土日の活動に参加できなくなった。(保護者) 本人が仕事に就いた。大変お世話になった。都合がつけばまた参加するかもしれない。(保護者) 私(保護者)が仕事で参加できなくなったため。コーチの方々が本当によくみてくれていて感謝している。(保護者)
移動・活動場所等の制約	片道100kmの移動が大変だった。(ボランティア) 参加したいが活動場所が遠くて行けない。(保護者) 会場までと私(保護者)の都合で参加できない。(保護者) 本人に合う内容、場所、時間のものがあまりなかった。(保護者)
活動内容に関する課題	障害の程度に合わせた活動プログラムを組んだ方がいい。(保護者) この障害者スポーツ組織での活動だけでは限界を感じた。(保護者) 体を動かす楽しみを、と思い参加していたが、「成果」であったり、一部の保護者だけの集まりのように感じた。(保護者) 本人が運動が好きではなかった。(保護者)
体調などの理由	両親の介護のためやむなく休止した。すぐ再開できるだろうと思っていたが、長引いている。いずれ再開したいと思っている。(保護者) 病気の都合で活動場所まで行けなくなった。(保護者) 転居と病気。(ボランティア)
経済的な理由	このような活動は経済的にゆとりのある人でないといけないと実感している。(ボランティア) 保護者の参加が前提となっている雰囲気、この障害者スポーツ組織は恵まれた特別な人たちの活動だと感じる。(保護者)
その他(感謝)	息子にとってとても有意義な時間をすごさせていただき感謝している。残念ながら発作が頻繁に出るようになり参加できなくなった。(保護者) 就学前の知的障害がある人たちの活動プログラムを担当していた。楽しく、仕事にも役立った。すばらしい経験をさせていただき感謝している。(ボランティア)

間違い」を確認した。続いて、「交通費などの負担がたいへん」「活動場所までの移手段の確保がたいへん」「活動の頻度(回数)が多い」「活動のために時間をやりくりするのが大変」など活動環境が関係していることから「移動・時間等の負担」因子とした。第4因子を、「活動理念・方針に同意できない」因子とした。4因子間で中位の相関がみられた。

(3) 自由記述コメント分類

今回回収した41件の調査票のうち、25件で自由記述コメントの記載があり、KJ法(川喜田1967)を用いて7つのカテゴリーに分類した。(表4)

「会費を払わないで役員をつとめていたり、大会に参加する人がいて疑問を感じた。」「前から参加しているグループの方たちがいて、新しいメンバーは入りにくい状況だった。」「同じ障害を持っている仲間全員で差別なく楽しめる場所だと思っていたがそうではなかった。一般の教室の方が差別感なく扱ってくれると感じた。」など5つのコメントを集約して「メンバー間の関係・雰囲気」カテゴリーを得た。次に、「就職したので休止している。」「本人が就職をして、本人としても休日は休息したいようだ。」「本人の仕事の都合上、土日の活動に参加できなくなった。」など仕事に関する5つのコメントを集約して「仕事などの都合」カテゴリーを得た。さらに、「片道100kmの移動が大変だった。」「参加したいが活動場所が遠くて行けない。」「会場までと私(保護者)の都合で参加できない。」「本人に合う内容、場所、時間のものがあまりなかった。などから「移動・活動場所等の制約」カテゴリーを得た。以下、同様に「活動内容に関する課題」「体調などの理由」「経済的な理由」「その他(感謝)」のカテゴリーを得た。

5. 考察

(1) 知的障害者スポーツ休止、離脱の要因

本研究では、知的障害がある人たちのスポーツ活動に関して、一度は障害者スポーツ組織に会員登録したものの活動を休止、あるいは離脱する要因等の検討を行った。その結果、大まかに参加者(回答者)側の理由に関するものと、障害者スポー

ツ組織側や活動内容に関するいくつかの因子、およびカテゴリーを確認した。

このうち健康面などの「個人的な理由」因子や、仕事など「時間等の都合」因子については、参加者の生活上の事情などが影響しており、たとえば障害者スポーツ組織やスポーツ場面でのマネジメント等とは直接関係のないものと考えられる。実際、回答者の37%が休止・離脱する以前に約4年以上の活動期間があり(表1)、当該障害者スポーツ組織で活動することに納得、一定の理解があったものと考えられる。

一方、「当該障害者スポーツ組織に対する関心の喪失」、あるいは「スポーツボランティアに対する関心の喪失」因子については参加者の、障害者スポーツ組織や活動内容に対する意識が表れているものと考えられる。これは第2の質問群である障害者スポーツ組織・活動内容に関する因子分析の結果で得られた、「参加動機・条件とのズレ」「活動内容への思惑違い」因子も関係していると考えられ、運営マネジメント等の影響もあると推察する。

参加者が思い描いていた障害者スポーツの在り方や自分の関わり方と、実際の活動内容や団体の理念、方針が合っていないならばこのような結果になってしまい、最終的に活動の休止や離脱につながる可能性がある。田引(2009)が知的障害者スポーツ組織のボランティアを対象にした調査においても、負担感や活動内容への思惑違いなどの結果が示されており何らかの対応が欠かせない。たとえば当該障害者スポーツ組織の活動目標、理念、方針などを共有、再確認する機会を設ける、あるいは参加者などで意見交換、情報交換する機会を充実させるなどの工夫が求められる。

自由記述コメントにおいても、仕事や活動場所への移動、体調面など参加者側の理由に関するカテゴリーが得られたが、同時に、「メンバー間の関係・雰囲気」「活動内容に関する課題」カテゴリーでも多くのコメントが得られた。(表4)当該障害者スポーツ組織にとっては厳しいコメントも確認できる。選手(障害者)のスポーツへの参加動機、継続性、コミットメント等と、他者からの意識や態度との関係も報告されており(中込他2007、Robin et al.2004)、関係者の意識や雰囲気

気が結果的に障害当事者のスポーツの成果や継続性に影響を及ぼしてしまうことが懸念される。前述同様、ここでも参加者側のニーズと団体側の活動理念、方針とのマッチングが不可欠であり、当該団体で活動を始める（入会）前、あるいは活動途中で理念や情報の共有、再確認の場所や機会を設けること等が期待される。荒井他（2009）が示唆する知的障害者の運動の促進要因としての「家族の活用」も重要だと考える。

また、因子分析からも、自由コメントからも会場までの移動に関する要因が抽出され、会場や移動に関する多くのニーズ、課題があることを確認した。とりわけ知的障害がある人たちは一人での移動に制約がともなうことが少なくない。活動場所の工夫、あるいは外出支援に関するサービス等を利用する仕組みの充実、活用が求められ、今後、知的障害者のスポーツ活動を推進していくために必要な視点だと考える。

（2）まとめと今後の課題

本研究では、知的障害がある人たちのスポーツ活動に関して、参加者（回答者）が活動を休止する、あるいは離脱する要因等の検討を行ってきた。その結果、参加者側の生活上の事情と、当該障害者スポーツ組織に対する意識に関する要因があることを確認した。そのうえで、ここでの結果を一般化する限界と今後の課題に触れる。

まず、回答者のうち、知的障害がある人たちについてはその保護者等が本人にかわって回答している。このため、今回分析に用いた回答はどうしても保護者の意向を反映したものになってしまっている。当事者のスポーツに対する意向に反して休止、離脱という選択を余儀なくされてしまったことも否定できない。知的障害がある当事者に対する調査であれば精度は高まると考える。

加えて、回答者のこれまでのスポーツ経験、あるいは障害者スポーツ組織やスポーツ活動に対するニーズの度合いなどはそれぞれ違い、結果に影響している可能性は否定できない。今回はここまでの調査、分析を行えていない。

また、今回の調査では回収率が低く（20.4%）、所属団体からの休止、離脱者に対する追跡調査の限界を感じた。回答しないという姿勢そのものが

当該障害者スポーツ組織に対するメッセージとなっている可能性もある。

今後はこれらをふまえ、研究を進めていく必要がある。

謝辞

本研究は科研費（基盤研究C、24500765）の助成を受けたものである。また、本調査の実施には、公益財団法人スペシャルオリンピックス日本、ならびに関連地区組織等に多大なるご協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

<注>

1) 本稿で調査対象とした知的障害がある人たちのスポーツ活動を支援するスペシャルオリンピックス組織では、活動を支える人たちを総称してボランティアとしている。とくに知的障害がある当事者と一緒にスポーツ活動を実施するボランティアを「コーチ」、または「コーチボランティア」と呼んでいる（スペシャルオリンピックス日本編2014）。

2) 本調査では、たとえば事務局作業、財務広報活動などスポーツ場面以外を担うボランティアを「一般ボランティア」としている。

<文献>

荒井弘和・中村友浩（2009）『知的障害者の親における身体活動・運動実施の阻害要因と促進要因』体育学研究、54（1）：213-219.

藤田紀昭（2003）『身体障害者施設における運動・スポーツの実施状況に関する調査研究—障害者に対する運動・スポーツプログラム普及のための基礎資料—』障害者スポーツ科学、1（1）.

藤田紀昭（2008）『障害者スポーツの世界』角川学芸出版.

川喜田二郎（1967）『発想法』中公新書.

内閣府編（2002）『障害者白書平成14年版』東京コロニー.

内閣府編（2003）『障害者白書平成15年版』国立印刷局.

内閣府編（2007）『障害者白書平成19年版』佐伯印刷.

内閣府（2008）『障害者施策総合調査「生活支援」、「保健・医療」に関する調査報告書の概要』内閣府.

中込四郎・山本裕二・伊藤豊彦（2007）『スポーツ心理学』培風館.

日本障害者スポーツ協会（2010）『障害者スポーツの歴史

- と現状』日本障害者スポーツ協会.
- 日本体育学会監(2006)『スポーツ科学辞典』平凡社.
- 文部科学省(2011)『スポーツ基本法～スポーツの力で日本を元気に～』文部科学省、東京.
- 守田香奈子・七木田敦(2004)『知的障害児のスポーツ活動への参加を規定する要因に関する調査研究』障害者スポーツ科学、2(1):70-75.
- Pelletier, L., Fortier, M. S., Vallerand, R. J., Tuson, K. M., Briere, N. M., and Blais, M. R. (1995). Toward a new measure of intrinsic motivation, extrinsic motivation, and a motivation in sport: The sport motivation scale (SMS). *Journal of sport and exercise psychology*, 17, 35-53.
- Robin, J. Farrell., Peter, R.E. Crocker., Meghan, H. McDonough., and Whitney, A. Sedgwick. (2004) The driving force: Motivation in Special Olympians. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 21(2): 153-166.
- 総理府編(1997)『障害者白書平成9年版』大蔵省印刷局.
- 総理府編(2000)『障害者白書平成12年版』大蔵省印刷局.
- スペシャルオリンピックス日本編(2014)『ゼネラルオリエンテーション標準テキスト』公益財団法人スペシャルオリンピックス日本.
- 田引俊和(2009)『障害者スポーツを支えるボランティアの意識の特徴に関する一考察』北陸学院大学研究紀要、第1号、241-249.
- 田引俊和(2012)『知的障害のある人たちがスポーツ活動に参加する理由』北陸体育学会紀要、第48号.
- 高橋明(2004)『障害者とスポーツ』岩波新書.
- 田尾雅夫、川野祐二(2004)『ボランティア・NPOの組織論』学陽書房.
- 松岡宏高、小笠原悦子(2002)『非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機』*体育の科学*、52(2)、p277-284.
- 山口泰雄(2004)『スポーツ・ボランティアへの招待』世界思想社.